

| | |
|--------|---|
| 研究課題 | オンライン授業支援システムを活用した対話型教育講演会の実施 |
| 副題 | ～「共通了解志向型ディベート」で知的能動性・対話力を育む～ |
| キーワード | 対話力 教育講演会 オンライン授業支援システム |
| 学校/団体名 | 学校法人津曲学園 鹿児島修学館中学校・高等学校 |
| 所在地 | 〒890-0023 鹿児島県鹿児島市永吉二丁目9番1号 |
| ホームページ | http://www.shugakukan.ed.jp/ |

1. 研究の背景

本校で毎年実施している教育講演会について、「一方向的な講義式のものだと中学1年生から高校3年生まで全員が能動的に終始聞き続けるようにするのが難しい」ということや、「質疑応答の時間を設けても、挙手制では生徒からの質問が出にくい」といった課題があった。

2018年度、総務省地域情報化アドバイザー大辻雄介氏に講師を依頼し、オンライン授業支援システムを用いた双方向型の教育講演会を実施した。スクリーン上で複数の生徒の反応や意見を同時に可視化することで、生徒が能動的になり、対話的なものとなった。

今年度は、教育哲学を専門とされている苫野一徳氏（熊本大学准教授）に2回の講演を依頼した。苫野氏の著書には、哲学の蓄積を踏まえた考え方やより良い対話の仕方が書かれている。その内容も踏まえながら昨年度使用したオンライン授業支援システムやワークショップ形式を活用して、より対話的な講演会にする意図を持って計画した。

2. 研究の目的

以上のことから、本研究では、教育講演会を「一方的に聴くだけ」から「対話的に参加する」へ転換させ、生徒が学校の在り方について実際に保護者や教師とも対話する土台や場をつくることを目的とする。具体的には、(1) ICTを活用したより対話的な教育講演会の実施、(2) 生徒の対話力向上の2つを目指す。また、講演会を事前事後の教育活動とつながりを持たせ、日常的なICT活用や対話力育成にも波及させたい。

選挙権年齢が18歳以上に引き下げられ、中学・高校段階で主権者として必要な対話力を育み、社会の創り手として生徒を送り出していく必要性はますます高まっている。苫野氏も「学校・ルールをつくり合う道徳教育」を通して「市民教育」をすることが学校教育の重要な役割だとしている（苫野、『ほんとうの道徳』2019）。

本研究は「学校・ルールをつくり合う道徳教育」を通して生徒がより主体的に学校づくりに関わり、その過程を通して「市民」として必要な資質を育むという大目的の前段階に位置づけられる。より良い学校や社会を自ら創っていくという姿勢とそのための資質・能力が中高生に備わっていくことは、本校だけでなく社会全体にとっても意義のあることだと考えられる。

3. 研究の経過

次ページの表1は、今年度の研究の過程を時系列でまとめたものである。本校研究部を中心に、PTA執行部の保護者やPTAの学校側担当者、生徒会等とも連携して取り組んだ。

表1 研究の過程

| 月 | 取組内容 (→ 事前指導、講演会時のワークシートとアンケートを中心に実践評価) |
|-----|---|
| 4月 | <ul style="list-style-type: none"> ・オンライン授業支援システム(スクールタクト)を導入 ・オンライン授業支援システム活用校内研修・活用事例共有会(全教職員対象)① ・校内職員研修や授業時にも、教員・生徒がオンライン授業支援システムを使用 ・2018年12月中旬に学級文庫として全クラスに設置した苫野一徳氏(教育講演会講師)の著作(10冊)を新年度のクラスに引継ぎ確認し、全生徒にブックリストと行事案内を配布 |
| 6月 | <ul style="list-style-type: none"> ・講演会講師著作をもとにした入試問題やワークシートを使用し、事前指導を実施 ・パナソニック教育財団オンラインサポート① |
| 7月 | <ul style="list-style-type: none"> ・苫野一徳氏教育講演会【1回目】(7月17日) |
| 9月 | <ul style="list-style-type: none"> ・オンライン授業支援システム活用校内研修・活用事例共有会(全教職員対象)② |
| 10月 | <ul style="list-style-type: none"> ・パナソニック教育財団オンラインサポート② ・教育講演会の事前学習として講演会講師の著作読書会 ・苫野一徳氏教育講演会【2回目】(10月30日) |
| 11月 | <ul style="list-style-type: none"> ・他校事例視察(岡山・高知) |
| 12月 | <ul style="list-style-type: none"> ・パナソニック教育財団オンラインサポート③ |
| 2月 | <ul style="list-style-type: none"> ・成果と課題の整理、次年度に向けての展望 |

4. 代表的な実践

(1) 事前指導

講演会当日に対話の時間をできるだけ確保し、対話がスムーズに進むように、以下2点を意識した事前指導を行った。

- ① 講師の基本的な考えを事前を知る。
- ② 当日使用する予定のアプリやキーボードなど ICT 機器の扱いに慣れる。

【それぞれの具体的な実施内容とその主な意図】

① 講師の基本的な考えを事前を知る。

- ・全クラスに講師の著書『勉強するのは何のため?—僕らの「答え」の作り方』を設置し、講演会前に読むようにした。



〔図1 学級文庫として設置した講師の著書〕

(意図: 中高生にとって切実な「勉強する理由」を考えさせながら、講師の基本的な考えを知ること、当日の短い時間内でも対話する時間をできるだけ確保するため。)

- ・教職員と保護者にも講師の著書『「学校」をつくり直す』を当日までに読むよう呼び掛けた。
- ・6月18日と7月13日に実施した事前指導において、ワークシートを用いて講師の著書に書かれている生産的な対話をするときに重要なポイントを共有した。(意図: 対話の際に陥りがちな「単純な二者択一を迫るような問い方」や「自分の経験を一般化しすぎる語り方」などを意識して、より生産的な対話を成立させる土台をつくるため。)
- ・講演会当日に講師とパネルディスカッションを行う生徒を募集し、著書の感想や講演会当日聞きたいことなどを書いたエントリーシートを提出させた。

② 当日使用する予定のアプリやキーボードなど ICT 機器の扱いに慣れる。

- ・全教職員対象のオンライン授業支援システム活用校内研修会を2回実施した。
- ・校内職員研修や会議時に全教職員がオンライン授業支援システムに触れる機会をつくった。
- ・生徒に対しては、「総合的な学習の時間」に実施している課題研究の指導においてできる限り使用場面をつくった。(意図：異なるクラスや学年が混ざって実施されていたので、教員や生徒への広がり期待できたため。)

(2) 苫野一徳氏教育講演会【1回目】(7月17日)

苫野一徳氏に加え総務省地域情報化アドバイザー大辻雄介氏に来校していただき、大講義室で実施した。以下の3時間に分けて講師とのパネルディスカッションとICTを活用しての全員対話を各時間行った。

5限(13:30~14:20) 中学1~2年(150名程度)対象

6限(14:30~15:20) 中学3~高校3年(150名程度)対象

7限(15:45~16:35) 保護者・教職員・地域の方(150名程度)対象

【実施形態・内容の主な特長とその主な意図】

①事前にエントリーシートを提出した生徒の中から代表数名ずつを選び、講師とのパネルディスカッションの形式で実施した。(意図：本校の実際の生徒と講師が行う対話を中心にする事で、講師の話が全員にとっても身近になり、さらに、講師と直接対話をしている同級生の姿をロールモデルとするため。)

②スマホやPCから質問やメッセージを集約することができる「sli.do」というアプリを利用し、スクリーン上で同時に複数の生徒の反応や意見を可視化した。講演会の時間は生徒たち自身のスマホの持ち込みや使用も認め、所有していない生徒には学校のタブレットを貸し出した。(意図：挙手したり、直接対話したりすることが難しい生徒やそのような関係性の集団でも、講演内容について自分の考えを持ち表現する術を与え、全員を能動的にするため。)



〔図2 第1回講演会でのパネルディスカッション〕

(3) 苫野一徳氏教育講演会【2回目】(10月30日)

約3時間に渡って(13:30~16:20)、体育館で中学・高校全学年の生徒、保護者、教職員、地域の方合同で、ワールドカフェ形式を中心に直接対話の時間を増やした。



〔図3 第2回講演会でのワールドカフェ〕

【実施形態・内容の主な特長とその主な意図】

- ・ワールドカフェと呼ばれるワークショップの形式で実施した。ワールドカフェは、「多様な人々が集まり、オープンな会話をすることで、お互いのアイデアをつなぎ合わせ、新たな知

恵を生み出す方法」(アニータ・ブラウン他、2007)とされている。400人程度で実施するため、専門のファシリテーター(和泉裕之氏)に進行を依頼した。(意図:立場の異なる相手との対話を通して、もともとの自分の考えをより良いものにすることを意識させるため。)

※ワールドカフェタイムライン(概要)

13:30-14:00 [30min] イントロダクション、チェックイン

14:00-14:25 [25min] 苫野氏話題提供「なぜ学校・ルールづくりを自分たちでやるのか?」

14:30-15:00 [30min] 第1ラウンド

問い:「話を聴いて、感じたこと、考えたことは?また、気づいたり、疑問に思ったことは?」

15:00-15:40 [40min] 第2ラウンド、席替え→第1ラウンドの時の席に戻る

問い:「私にとって理想の学校とは?(私はどんな学校・ルールをつくりたい?)」

15:45-16:20 [35min] 第3ラウンド、まとめ

問い1:「今日の感想は?」 問い2:「私が探求していきたい問いは?」

・ワールドカフェの各グループのまとめをタブレットで撮影してスクリーンで全体共有する計画だったが、当日のファシリテーターの判断で実施しないことに変更した。

5. 研究の成果

(1) 目的1「ICTを活用したより対話的な教育講演会の実施」について

「sli.do」を利用した実施等の工夫により、挙手して発言したり、直接対話したりすることが苦手な生徒たちでも自分の考えを表現することができ、より対話的な講演会となった。

講演会の主催であるPTAの「理事会だより」でも、会長が以下のように感想を述べている。

第2回理事会だより 《PTA会長より》

平成31年9月2日

7/17に苫野一徳氏を招いてPTA主催教育講演会を開催致しました。主催者として生徒対象・保護者対象すべてに参加致しましたが、生徒代表のパネリストの生徒達の発言力に感心し、とても中身の濃い内容でした。講演の中で意見交換の手段として使われたSli.doというシステムは、発言ではなく文字で各々意見を発信できる為、積極的に意見し真面目に取り組む姿が見受けられました。次回10月は、保護者の皆様に多数参加して頂ける形で考えております。

以下、実施形態との関係を詳しく述べる。

① パネルディスカッションの効果について

パネルディスカッションでの対話を中心にする事で、同じ講師の話から学年や実施時間によってかなり異なる考えを引き出すことができた。代表数名であっても、その場の生徒の考えを反映し、聞きたいことを聴けることで、多くの生徒が能動的になり、完全に事前に準備された一方的なものではなく、対話的な講演会になった。

次のような生徒の感想にも、「講師の話が全員にとっても身近になり、講師と直接対話をしている同級生の姿をロールモデルとする」という意図が伝わっていることが表れている。

「前に出ていた先輩の意見がすごいと思ったし、難しかった。だけどその意見に興味を持つことができた」(中1) 「いろんな人の意見がきけてとてもおもしろかった。」(中1)

② ICT 活用の効果について

進行役からの「勉強するのは何のためだと思いますか？」などの質問に対して、「sli.do」で積極的に回答が書き込まれた。50分という時間の中で、**中学1～2年対象の時間が全体で700回程度の書き込み、中学3～高校3年対象の時間が全体で400回程度の書き込み**があった。どちらも一人当たり複数回意見を書き込んでいることになる。(後者が減っているのは、進行役が前者の時間の反省をもとに「聴くときは聴く」という指示を出し、書き込みの時間帯のコントロールを強めたためと思われる。)

普通の講演会では、極めて限られた人数の参加者が数回発言する時間があるかどうかだ。それと比べ、強いプレッシャーがかからず、意見を表明しやすいという点では、明らかに効果的な実施形態であると言える。生徒の感想でも「アプリで自分の意見とみんなの意見を見ることができいろんな考えについて知ることができた」といった好意的なものが多かった。

以上のように、講演会当日やその後の生徒保護者の反応から、教育講演会を「一方的に聴くだけ」から「対話的に参加する」へ転換できたと言える。

(2) 目的2「生徒の対話力向上」について

事前指導で使用したワークシートにあった「学校の先生と塾の先生、どっちがいい？」という質問に対して、**約70% (269名中189名)**の生徒が「学校の先生」か「塾の先生」と答えていた。そのような二者択一の問い方のことを講師の苦野氏は「問い方のマジック」と呼び、よりよい考えや対話のためには気をつけなければならないとしている。

事前指導を通して、**想像以上にこの「問い方のマジック」にひっかかってしまう生徒が多いことが確認された**。一方で、この問いに対して「問い方のマジック」にはまらず、以下のように回答している生徒も**約25% (269名中66名)**いた。

| |
|---|
| 「自分の接し方次第」(中2)「どっちも」(中1)「状況次第。どちらとも言えない。」(高3) 「問い方のマジック!! ☆」(中3)「生活面：学校の先生、勉強面：塾の先生」(中3) |
|---|

さらに、「問い方のマジック」にひっかかっている場合でもそうでない場合でも、「自分の経験を一般化しすぎる語り方」で理由が書かれていることが少なくなかった。このことを講師の苦野氏は「一般化のわな」と呼び、よりよい考えや対話のためには気をつけなければならないとしている。このように、**事前指導を通して、苦野氏がよりよい対話のために必要だとしている点について教員も生徒も意識することができ、現状を把握することもできた**。

その後2回の講演会を経て、生徒全員にアンケートをとった。このアンケートで5割程度の生徒が「**対話において、自分自身の経験を過度に一般化せず、根拠をもって自分の考え方を伝え、相手の意見の根底にあるものをとらえて共通理解を見出すことを意識できた**」と答えていた。今回の研究で「対話力をどのように定義するか」は実践しながら考えた。その中で重視したのがこの点で、生徒全体からすると5割程度の達成度ということになる。

また、「**学校や社会全体をより良くするために考えたり発言したりする**」という気持ちを持ってたかを尋ねたところ、**76.2%が「はい」と回答した**。(参考:2019年11月の日本財団「18歳意識調査」によると、「自分で国や社会を変えられると思う」と考える日本の若者は**18.3%**。

最も高いインドは 83.4%。日本の次に低い韓国の 39.6%と比べても日本はその半数以下)。こういう姿勢をもっているかどうか大きな意味では「対話力」に含まれうるとするなら、この成果は大きいと言える。

6. 今後の課題・展望

今回当初予定していたオンライン授業支援システム（「スクールタクト」）を変更し、当日は「sli.do」を使用した。「スクールタクト」の全校的な浸透が当日までに進まなかったため、より使いやすいものにする必要があったためだ。実施形態も「共通理解志向型ディベート」まで進むことはできなかった。**普段の ICT 活用を充実させることと、講演会などでの簡便性や使用の習熟度を配慮することとのバランス**を考えることが課題である。

また、**実践の評価**についても課題が残った。得居（2018）らの「子どもの哲学における対話型教育の評価法」には、個々の子どもの対話力だけでなく「集団の対話力」についての評価が言及されている。今回はワークシートの記載内容やアンケート結果などから個人の対話力についての分析が中心であった。今後は集団の対話力についても、hyper-QU や授業アンケートの結果などを基に分析できないか検討していきたい。ワールドカフェでの生徒たちの対話の様子を録音したデータをどのように分析するかも課題として残された。

展望としては、学校の具体的な問題について生徒・保護者・教師の三者が更に深い対話ができるようにしていきたい。そのための**大きな課題が「対話の時間や場をどうやって十分に確保するか」である。これを解決するために BYOD 環境を整備し、「電子会議室」等の活用方法を探りながら、生徒の主体性や対話力をさらに高めることを考えていきたい。**

7. おわりに

中学 1 年生の講演会の感想に「学校は生徒たちひとり一人の努力や考えで変えることができるのだ。ひとり一人にある問題、そして学校全体の問題を少しずつ解決していけば前に進んでいけるのだ。」と書かれていた。他にもそのような「生徒がより主体的により良い学校や社会の創り手になってほしい」という最終的な目的が果たされていると感じられる声がすでに聞かれた。ことばの力、対話の力でより良い学校や社会を自ら創っていかうという姿勢がさらに多くの生徒に備わっていくことを大いに期待して実践を継続していきたい。

また、このような実践に協力いただいた PTA や講演会講師の方々、パナソニック教育財団、及び「オンライン・サポート」で御助言くださった明星大学今野貴之先生に心から感謝したい。

8. 参考文献

- ・ 苫野一徳（2013）『勉強するのは何のため？—僕らの「答え」のつくり方』日本評論社
- ・ 苫野一徳（2019）『ほんとうの道徳』トランスビュー
- ・ 得居千照・河野哲也（2018）「子どもの哲学における対話型教育の評価法：道徳教育と総合的な学習への導入を視野にいれて」立教大学教育学科研究年報
- ・ アニータブラウン他（2007）『ワールド・カフェ～カフェの会話が未来を創る～』ヒューマンバリュー